脳梁欠損症の特徴

現在のところ、脳梁欠損症を定義するような、外から見ただけで診断できる明らかな症状はありません。左右の大脳をつなぐ脳梁（のうりょう）が、欠けていることが診断要因となっています。脳梁欠損症の患者が示す症状は、他の疾患（例えば、脳性（小児）麻痺、ぜんそく、アレルギー、知能発育不全など）との関係によって、さまざまなケースが見られます。そのため、一人一人の脳梁欠損症患者は、それぞれが非常に特殊である、と思われてきました。

しかし、近年の研究によって以下のような脳梁欠損症に共通の症状が明らかになってきました。

- 運動、言語、その他の認知機能の発達が遅い
- 運動調整機能が低い
- 特定の触覚感覚が鈍い。例えば、食べ物を口に入れたり、何かに触れたときに、健常者よりも鈍感である。
- 痛みの閾値が高い
- 複雑な課題をこなすことができない。簡単な診断では明らかにならないが、実社会での会話がぎこちない、複雑な問題を合理的に考えることができない、現実の問題に対処できない、創造性に欠ける、など。
- 社会生活を営むことが難しい。他人の気持ちや考えをくみとることができない、顔の表情や声のトーンなどから場の雰囲気を察することができない、高度なユーモアを解さない、ある行動が起こしうる未来の可能性を予見できない、など。
- 自分が抱えている色々な問題（特異な振る舞い、社会生活における問題、認知機能の低下）に自分で気づいていない。

これらの認知、社会生活における問題は、青年期から成人期にかけてより明らかになることが多い。

より詳しい情報は:

National Organization of Disorders
of the Corpus Callosum (NODCC)
国立脳梁障害機関
18032-C Lemon Drive PMB 363
Yorba Linda CA 92886
USA

(714) 747-0063
www.nodcc.org

国立脳梁障害機関 (NODCC) は、２００２年につくられた非営利団体です。脳梁欠損症やその他の脳梁に関わる障害を持った人々やその家族をサポートし、障害の研究を促進することを目的としています。

NODCCの目的:
脳梁障害患者たちが、サポートを受け、豊かな人生を送れるように、社会を改善することをゴールとしています。そのために、脳梁障害患者の研究、教育、支援活動、ネットワークの構築を通じて、一般社会に脳梁障害を認知・理解を広げることを目的としています。

NODCC は会員の年会費によって支えられています .

のうりょう
脳梁障害のてびき

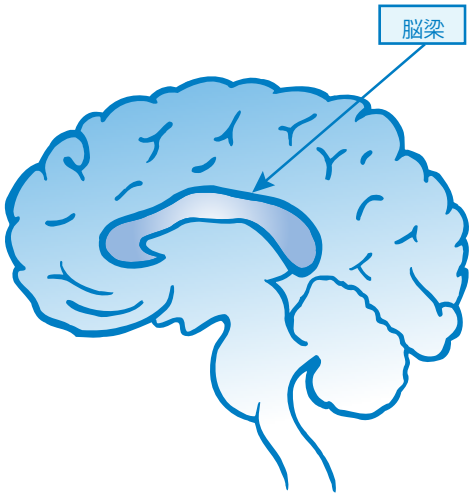
脳梁欠損症、
関連障害

製 作
NODCC

「脳梁」って何ですか？

脳梁は、左脳と右脳をつないでいる神経繊維の束で、左右の脳の間で情報を交換するのに役立っています。

脳梁を通る神経繊維は、二億本以上にあります。



脳の断面図

各種の脳梁の障害

完全脳梁欠損症

部分的脳梁欠損症

脳梁の発育不全
　脳梁が薄くなることがあります

脳梁形成不全
　いびつな形の脳梁が形成されることがあります

脳梁障害の原因とは？

たくさんの複合的な原因が考えられます。 妊娠五週から十六週の間に、脳梁の発達が阻害されることがあります。原因となりうるのは、

- 妊娠中の感染症、もしくはウイルス性疾患（例：風疹）
- 染色体異常（例：８トリソミー、１８トリソミー、アンダーマン症、アイカーディー症）
- 中毒代謝性疾患（例：胎児アルコール症候群）
- 脳梁の発達阻害（例：嚢胞（のうほう））

脳梁障害を診断するには

以下の方法により脳梁を検査することができます。

- 超音波による産前／産後の検査
- CTスキャン
- MRIスキャン

脳梁欠損症の発生率は？

脳梁欠損症がどれくらいの割合で発生するかについては、様々な推定がなされており、健常者の子供の千人に七人という高めの予想から、百万人に五人という非常に低めの予想まであり、確実なことは分かっていません。発達障害を抱える子供百人の中には、二人ほど脳梁障害の子供が含まれているのではないか、という推定もあります。より多くの人々が脳スキャンなどの診断を受ける機会が増えれば、それに伴ってこれらの見積もりもより正確になっていくでしょう。

脳梁欠損症やその他の障害は、病気なのでしょうか？

脳梁障害は病気ではありませんが、脳構造には明らかな異常が認められます。脳梁障害があっても健康に暮らしている人は多いですが、なかには、脳梁障害以外の原因で（てんかんやその他の病気など）、医療行為を受けなければならない脳梁障害患者も多くおられます。

脳梁障害は治療可能でしょうか？

脳梁障害は「治る」たぐいのものではなく「うまくつきあっていく」タイプの症状です。ただし、効果的なセラピーなども知られており、それらをうまく使うことで、脳梁欠損症患者やその他の脳梁障害の患者が、よりよい生活を送ることが可能になります。

脳梁障害を支えることができる専門家とは：

- 行動心理学者
- 早期介入治療の専門家
- 遺伝学者
- 神経科医
- 神経心理学者
- 作業療法士
- 眼科医
- 小児科医
- 理学療法士
- 養護教師
- 言語聴覚士